

目次

第1章 私はこうして国連職員になった

不幸に見えて実はありがたいもの／

2年間、1日に12時間の猛勉強／退路を断ち、ジュネーブへ

第2章 国連はグローバル化の先取り組織

「専門分野」の待遇「年齢」——私が国連に入った理由／国連とはこんな組織／

日本企業と国際機関の働き方の違い／国際的転勤と専門職・契約制度／

本部勤務は2割、開発途上国勤務が8割／英語はできて当たり前／

国際機関の人事制度／専門職以上は個室／

国連は政治的競争社会（組織内の論争からアイデアが生まれる）／

自己主張が求められる／「野心家」は褒め言葉／

人の行く裏に道あり花の山／国際機関職員に望ましい三つの資質

第3章 難民問題と国連——いま世界で起きていること——

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）とは／

国際政治を揺るがす難民問題／難民って誰のこと？／

冷戦終結後に変わった難民マップ／国内避難民問題と保護する責任論／

緊張事態への対応／パレスチナ難民のいま／

難民キャンプの人口は3分の1に減少／難民グローバル・コンパクト／

「難民鎖国」日本の難民政策／

留学生としての受け入れ——難民高等教育プログラム／

難民支援の大きなポイントは経済支援

第4章 私が見た世界の人々

1 民族紛争のなぜ？を改めて考えた「バングラデシュ・ロヒンギャ難民キャンプ」

2 マラリアの洗礼を受けた「中部アフリカ・カメルーン」

3 封鎖されたレバノンの「シャティール・パレスチナ難民キャンプ」に潜入

第5章 国連という視点からみた日本と日本人

なぜ国際機関には日本人が少ないのか？／

高文脈から低文脈へ「コミュニケーション文化の壁」を越える／

国際機関で存在感に欠ける日本

第6章 個人としての国際競争力をつける9か条

1 最初の100日で成果を出す

2 リーダーシップをとる

3 上手に自己主張する

上司や部下から批判されたときは？／相手を批判するには？／

相手の要求を拒絶するときは？／相手に何かを要求するときは？

4 異文化コミュニケーション力をつける

書く／話す／読む・聞く

- 5 上司を管理する
- 6 オフィス・ポリテクスに対処する（政治的な行動は望ましい）
- 7 裸の王様にならない
- 8 軸足以外の2割の部分でかき回す
- 9 ユーモア力を身につける

付録 外務省JPO試験とは

国際機関に一定期間派遣をするJPO制度／

JPO試験の流れ／書類記述、面接試験など注意すべき点

おわりに

はじめに

この本を出版することになったのは、東京都港区六本木の東洋英和女学院大学の生涯学習センターで開講中の「国際機関で働いてグローバル人材になる」という講座がきっかけでした。このコースは2017年に開講され、好評だったことから、現在まで年に2回のペースで開かれています。全10回の講義を通して「グローバル人材」のあり方を学んでいますが、内容をもっと広く知ってほしい、ということから本書の企画につながりました。

本書の第一の狙いは、国際機関に就職してからの「生き残りと貢献術」について実例とともに学ぶことです。日本には国際機関で働いてみたいという志を持った若い人がたくさんいます。ですから、国際機関にどのようなようにして入るか、履歴書をどう書くか、面接試験にどう臨むかなどについてのガイド本なら結構あります。しかし、国際機関の雇用の基本は契約制度で競争も激しく、入ってから「生き残り」のほうが厳しいのです。

「世界の人たちを助けたい」との思いで国際機関に入っても、助ける力がなければ意味があり

ません。英語の力だけでなく、自分の考えを持ち、発信し、はっきりと自己主張もしなくては
いけません。そこでは組織に貢献するために「個人としての国際競争力」が問われますし、絶
えず努力することも求められます。「誰のために働くのか?」「どう働くのか?」も意識せざる
を得なくなります。

国際機関での働き方を知らないでいると、思うようなポジションに就くことができずに悩ん
だり、契約更新ができずに帰国せざるを得なくなったりすることもあります。事前に知ってお
くべきは、国際機関に入ってからどのようなように仕事をし、競争し、生き残り、自分の夢を達成し
つつ組織にも貢献するか、についてです。それでこそ国際機関に入るための準備も確かなもの
になります。

本書の第二の狙いは、今後ますますグローバルな競争にさらされる日本の企業で働く人たちに
働き方、生き方のヒントを提供することです。この数年、日本での働き方が急激に変わって
きています。世界的にグローバル化が進み、「終身雇用」「年功序列」「ジェネラリスト養成」を三本柱と
する日本の雇用システムは音を立てて崩れています。その代わりに「契約制度」「実力主義」
「専門職制度」が広がるでしょう。

新卒一括採用は時代遅れとなり、中途採用、通年採用が広がります。転職・転社もしつつ、専門性の開発を軸に自分のキャリアと人生を積極的にデザインしていくことが普通になるのです。外国人労働者の受け入れも始まり、今後の日本の職場では国籍も文化も違う外国人と協力したり競争したりする姿が見られるようになるでしょう。それどころか、ネットの時代、競争相手は外国にいる外国人かもしれないのです。

これらのことはまさしく国連では日常です。それはグローバル人材としての国際機関での働き方です。この先、日本での働き方も国際機関での働き方に近づいて行くでしょう。であれば日本で働くのであっても、国際機関での働き方、仕事術、生き方は参考になります。

さらにもう一つの狙いがあります。「人生100年時代」を迎え、60歳なり65歳の定年後の長い人生をどう生きるか、ということが、老後資金の確保と並んで、多くの人にとつての課題です。この問題は、シニア世代が大きくなるにつれてますます広がるでしょう。長い間、自分のために、家族のために、会社のために必死で働いてきた。この先、何を生きがいとすればいいのか……。そんなとき、「人のために働く」というオプションはどうでしょうか。

国内在住の外国人をボランティアとして助けたり、外国の貧しい人や難民を直接助けたり寄付などで間接的に支援することもできます。そのような活動を通して、若い人たちと交流する

ことで気持ちも若く保たれます。私自身、国連を退職してからは女子大で教えたり、NPOの仕事に関わったり、66歳でチャリティマラソンを始めたりしました。本書では、私と同じようなシニア世代の皆さんにエールを送るとともに、多少なりとも生き方についてのヒントを提供したいと思います。

本書の構成ですが、まず第1章で私が国連に入った経緯を明らかにし、第2章では国連機関の仕組みと働き方について触れます。日本との働き方の違いがわかると思います。第3章では、私が長年関わった難民の問題、難民を助けている国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）や国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）での経験を取り上げます。第4章では、30年以上前に訪れた難民キャンプがいまも残っているなど、難民問題解決の困難さについて書きました。そこで出会った難民の姿も描かれています。第5章では、国連の窓からみた日本人と日本のあり方について思うところを書いています。第6章では国連で戦って生き残り、公益のために貢献するための「9か条」をまとめました。付録として「外務省JPO試験とは」を加えています。

最後までお読みいただければ幸いです。